

られず、又人口の増加も期待されないのである。故に種々の加き優秀な種族の増産を圖り、米麥との混食を奨励して病を未然に防ぐことの急務なるを痛感する。徒らに米のみに依存しては、大和民族の繁榮は到底希求され得ないと信ずる。(昭和十八年五月)

## 第十五 ヒリッピンの脚氣と結核

### 一 比島の地域と住民

ヒリッピン群島は南方共榮圈諸地域中我國に最も近く、臺灣からの距離は僅かに六十五哩で、昔から日本との交渉が多かつた地域である。本群島は熱帯から亞熱帯に亘り散在する七十餘の島々より成つてゐるが、内四千六百餘は名も無い小島嶼である。總面積は二十九萬六千平方呎で、主な島はルソン島(首府マニラ)ミンダナオ島(首府ダバオ)、サマール島、ネグロス島、ハラワン島、ミンドロ島、レイテ島等である。

其處に住む民族は多種多様で總計千五百八十萬人と概算されるが、其中の七百十萬はビサヤ族で、次は二百十萬を算するタガログ族である。此の兩種族は文化の程度最も高く、社會的に重要な地位を占め、所謂比島人の中核を成すものである。その他イロカノ族(總數百七十萬)はルソン島の北西部に住み、比島人中最も勤勉だと言はれてゐる。其他の種族は七十有餘の多きに上り、ネグリート族の如き智能極めて低き原住民も八萬餘を算する。是等の比島住民の外に、古く南支那から移住した華僑がをって統計には十二萬となつてゐるが、その實數は約二十萬と稱され、比島の經濟界の實權を握つてゐる。

### 二 比島の脚氣

昔、比島は西班牙人の占領する處となり、統治三百餘年に及んだが、一八九八年北米の領土となつてからは北米式の物質文明の影響を受け、輕便浮薄になつたと言はれてゐる。著者は比島が米領となつてからあまり年數を経てゐない明治四十年にルソン島を訪れたことがあるが、その頃已に比島には脚氣が多く、マラリアの流行と共にこの地域の大患となつてゐた。爾來北米式の衛生施設も實現されたが、大正八年我國の脚氣研究の大家故島蘭順次郎博士が視察した時には、全島の脚氣死亡は一萬八千三百六十二人を算し、人口一萬に對し一六・七といふ高率なのに同博士も驚かれたとのことである。

當時已に脚氣の原因は食物中のビタミンBの缺乏によることが世界各地で證明されてゐたので、比島の衛生官憲は軍隊や刑務所に於ける主食物として白米を廢し、半搗米若くは熟米を使用し、脚氣の發生を豫防した爲めに、是等の場所からは脚氣死亡者を出さなかつたが、一般住民間には脚氣患者多く、毎年二萬内外の死亡者を見るの狀態であつたのである。

昔は比島でも、土産の米を手搗にし、半搗米程度の米を常用し、主食物は自給自足であつたと云ふが、米價となつてから政廳は政策上砂糖の生産を奨励した爲に、米作反別は減じ、且つ人口増加により米の需要が高まつて島内所産の米では不足を來し、泰國や佛印等から精白米を輸入して用ゐた。然のみならず、米本土から精米機がどしどし比島に輸入され、小さな島の農村にまで普及し、それが便利な處から農民は古來の手搗を全く止めて、機械搗にした白米を常食するに至つたのである。これが爲め脚氣は激増し、死亡率も高まつた。當時の比島衛生局長ドクター、ウィクター、ハイザー氏は島民の衛生上由々しき大事なりとし、脚氣豫防のため白米を廢止し、熟米又は半搗米を使用せし

めんとて、白米に課税する法案を總督の承認を経て比島議會に提出した。然るに、上院では辛うじて通過したけれども、下院で擱り潰されて實現し得なかつた。是は精米所を經營し、或は外米を輸入する華僑の米穀商人共が白米課税の爲め大打撃を蒙るので、比島人の議員等を買収して白米課税法案を暗から暗へ葬らしめたためであつた。發案者たるハイザー衛生局長は非常に残念がり、議員共の腐敗と無智とを痛嘆し、比島を去つてから後も機會ある毎に憤慨の語氣を友人間に洩らしてゐた。

其後比島に於ける衛生状態は舊態依然として不良で、脚氣死亡などは毫も減退の兆を示さない。即ち、最近入手した比島に於ける死亡統計を見ると、次の如くである。

死 因	一九四〇年實數	一九三五—五ヶ年平均
乳 兒 脚 氣	一四、二二七	一三、三九〇
成人 脚 氣	四、三一九	三、九一九
計	一八、五四六	一七、三〇九

脚氣の死亡率は成書などに三%と書かれてゐるから、それにより計算すると、毎年一萬七八千の死亡に對し五六十萬人の患者があることとなる。比島人の怠惰乃至低能率は、一はかゝる營養不良に基因するとも考へられるのである。

### 三 比島の結核

脚氣の蔓延は獨りそのみの害に止まらず、一般に營養不良を來し、體質は爲めに低下し、又乳兒死亡率を著しく高める。蓋し、熱帯及び亞熱帯に於ける高温多濕の氣候は人體のビタミンBの消費を甚だしく高める結果、主食物が

ビタミン皆無の白米であれば急ちビタミン缺乏に陥り、脚氣の症状を發すると同時に全身の抵抗力を弱め、他の疾病に對する感受性を高め、且つ斃れ易くするのである。即ち、脚氣は結核發生の温床となり、肺結核の蔓延を來す結果となるのである。今最近の比島に於ける結核死亡を擧げると、左の如く極めて多數に上るのである。即ち、

死 因	一九四〇年實數	一九三五—平均數
肺 結 核	三五、五八七	一九三九年
其他ノ結核	二、〇三七	三三、六四九
計	三七、六二四	一、九二六
		三五、五七五

結核の死亡率は普通一〇%とされてゐるが、それに従へば、比島には毎年二十五乃至二十七萬人の結核患者があることになる。

尙ほ肺結核は市街地の住民に多いのを常とするが、南崎雄七博士の近著「南方生活必携」によると、マニラ市の人口十萬に對する結核死亡率は正に左の如き高率を示してゐる。即ち、

都 市	一九三三年	一九三四年	一九三五年	一九三六年
マニラ市	五〇三・五	四五二・六	四八〇・〇	四六二・〇
東京市	一八二・一	一六九・六	一六七・二	一八八・四

南方諸地域中マニラ市の如く結核死亡率の高い處は他にない。さればにや、大東亞戰前マニラ市に駐在してゐた日本人中殊に青壯年階級の人が結核に罹り、或は彼地に於て斃れ、若くは壯圖を抱きながら空しく病體を携へて日本内地に歸還する者の輩出したるが如きは、皆同市で結核に感染し發病した爲めである。

#### 四 皇軍の善政

最近新聞紙の報ずる所によれば、比島に於ける我が軍政監部では臺灣より農業技師を招致し、蓬萊米の種子を移入して米の増産に着手されたとのことである。戰前比島に於ける米の年産額は百四十萬噸で、不足分約十四萬噸は泰、佛印等から輸入されてゐたといふ。故に島内で米が増産されれば、比島住民の食糧は充分自給されるから、一大福音と言はねばならぬ。尙ほこの上、精米所で比島所産の玄米を過度に精白することを禁止し、熟米若くは半搗米にして使用するか、或は雜穀との混食を奨励することになれば、所謂佛作つて魂を入れる善政となるのである。

今や比島の糧定全く成り、皇軍は優良種の蓬萊米を比島に移植して比島農民等に米作の技能を授けつゝあるから、遂からずして比島民の主食物たる米の自給自足も達成されるであらう。且つ、從來捨てゝあつた漏地等に稈(稗)等の雜穀を栽培して、榮養價高き食糧を増産すれば、食糧問題は容易く解決されるのである。更に精米機の使用を制限して玄米の精白度を規整する時は、一般家庭からビタミンB皆無の白米は驅逐されて榮養障碍は除かれ、直ちに脚氣の激減となり、引いては結核もその猛威を逞うする能はざるに至り、全島民の繁榮は招來されるものと信ずる。かくしてこそ我が八紘爲宇の大精神は如實に顯現されることになると思ふ。(昭和十七年十二月大詔演說一周年記念日)

## 第十六 蜜蜂と南方生活

一六六

### 一 蜜蜂の動物學

蜜蜂は極めて通俗な昆蟲の一つで、膜翅類に屬し、亞細亞種と歐羅巴種との二つに區別される。學問上歐羅巴種をアピス・メリヒカ (*Apis mellifica* L.) と呼び、亞細亞種をアピス・インヂカ (*Apis indica* L.) と稱し、日本産のものは其一變種とされてゐる。日本種は體軀小さく強健ではあるが、蜜を蒐めることに於て歐洲産に劣り、何となく日本人に似てゐるやうな氣がする。歐洲種も明治時代我國に移植されたものだが、現在は内地に相當廣まつてゐるであらう。

蜜蜂の起源に就て色々の説はあるが、東洋から出たといふのが本當らしい。人間が蜜蜂を飼育してその蜜を利用したといふ記録も随分古くからあり、又歐亞を通して蜜蜂に関する幾多の史實や傳説乃至詩歌が傳へられてゐる。我國に大陸から養蜂の傳來したのは非常に古い昔らしいが、明かな記録のあるのは徳川時代の中頃である。

蜜蜂は蟻と共に動物界に於ける社會生活を営む者の好標本だが、蜜蜂の飼育が盛んに行はれてゐるため頗る精しく調べられてゐる。蜜蜂の社會は成點に於て人間仲間などよりも遙に進歩し、統制のよくとれてゐる點では獨逸人も三合を避けざるを得ないであらう。

蜜蜂の一集團は二萬乃至八萬の個體からなり、其中には必ず一匹の女王蜂と數十匹の雄蜂と數萬匹の働蜂がゐる。女王蜂は最も發育のよい大きな雌蜂で、雄蜂之に亞ぎ大形で、働蜂は最も小さい。併し、働蜂は翅長く強健でよく活動し、營業、蜜及び蠟の蒐集や、幼蟲の育成並に外敵の防衛に當るなど、蜂社會の最も重要な役割をつとめる。

蜜蜂の發達を調べて見ると頗る面白い。女王蜂の産んだ卵から孵化した幼蟲は濃厚な食物を與へられる結果、僅か十六日で成蟲になるが、貧弱な榮養で育つた雌蜂は變態的で、廿日で發達して非常に活動的な働蜂となる。雄蜂は發達に二十四日の長期を要するが一時的存在にすぎない。

蜜蜂の巢は規則正しい無數の六角形の房窩からなつてゐる。是等の蜂窩の各に受胎した女王蜂は一つづつ、卵を産むのであるが、その産んだ卵は一ヶ月間に約千五百の多きを算する。各房内には卵と共に幼蟲の食物となる蜜が貯へられ、其の他の多數の房窩にも蜜が貯蔵される。若い働蜂は蜜を分泌し唾液で捏ねて巢を作り、これで各房に蓋をする。

蜂の活動は春から秋まで續くが、晩春に至り貯蜜が充分になると、蜂群が著しく膨脹する。さうなると、巢内に一大騷擾が起り、在來の女王蜂は全群の一半を引連れて分封する。一つの巢に二匹以上の女王蜂の存在は許されず、幼蟲期に次代の女王蜂一匹だけ残して他は皆働蜂が養殺して了ふ。

分封の度が重なると、蜂群は次第に縮少し、活氣も衰へ、遂に分封が停止するに至ることは動物細胞の増殖と同様である。雌女王蜂は交尾すると體形に變化起り、成熟して産卵を開始するものであるが、壯齡期には産卵數多く、老境に近づくにつれてその數は少くなり、且つ、此の時期には不受精卵が多い。そしてこの種の卵から雄蜂が發生するのである。

## 二 蜂蜜と養蜂事業

蜜蜂は春秋の開花期に活躍し、一回に約五〇粒の蜜を集め巣に運び来りて房に收める。蜜は房に收納されてから蒸発して約五割の水分を失ひ、働蜂の唾液中の酵素により、蔗糖は果糖と葡萄糖とに轉化し、濃厚粘稠となり成熟する。この成熟した蜜は房内に貯へられ蜂の食物となるのであるが、人は之をとり利用するのである。

蜂蜜は白色透明又は黄色を帯びた粘稠液で往々結晶を生じて白濁する。その成分は水一八・九%、粗蛋白一・〇八%、糖精二・九%でその残餘は葡萄糖と果糖である。尙ほチアスターゼやビタミンBをも含むので滋養劑になる。古來蜂蜜は調味料として又薬用として貴ばれてゐる。即ち、患者の恢復期に賞用される外、粘膜炎や外傷に塗布し、蟲齧の止痛劑に用ゐられ、又煉藥、丸藥、坐藥等の調製にも利用される。其他化粧品に混ぜ、或は漆や藍に加へて其の酸酵を止めるなどその用途は廣い。

蜂蜜の色や香氣は花の種類によつて著しく異なるものである。例へば、蜜柑の花からの蜜は芳香を有し、紫雲英の蜜は無臭であり、栗や桐の花の蜜は惡臭を有し食用にならぬが、工業上に使用される。蜂の巢を構成する蠟は薬用の外蠟燭、蠟燭などの材料となりその用途が又相當に廣い。

養蜂は國內各地に相當盛んに行はれ、特別な箱をしつらへ置き、蜂に養巢の場所を提供し、人間は蜜や蠟の分配にあづかるのである。此の事業は主に農家の副業として發達してゐるが、中には專業の養蜂家も尠くない。十餘年前農林省の調査した處によると、全國の飼蜂戸数は四萬四千餘で、蜂蜜及び蠟の産額は價にして九十一萬四千圓餘に上る

とのことである。養蜜など、比へものにはならないが、養蜂は農家の副業として益々奨励したいものである。

## 三 蜜蜂の壽命

蜜蜂の中でも雄蜂は最も短命で其の任務を果すと死んで了ふが、女王蜂の受胎せぬ者は五ヶ年位の壽命を保つ。働蜂は働蜂になると比較的壽命は短く、一ヶ月乃至數ヶ月しか生きない。働蜂の壽命に就て、北米の生物學者ホツチ氏の面白い研究があるから、次に之を紹介する。同氏は朝から晩まで働く働蜂の腦を組織學的に研究したのであるが、朝早く未だ活動を始めぬ蜂の腦細胞は皆健全な状態にある。然るに、夕方になつて疲れた蜂の腦では細胞に色々な變化があり決して常態ではない。但し、終日活動した蜂でも一夜休養してから調べて見ると、各細胞は常態に復してゐる。つまり一日や二日の短期間の過勞は休養によりて恢復するのである。之に反して毎日活動し続けられた蜂の腦細胞は破壊し復舊し得ぬ状態に陥る。そしてかくひどく變化した腦をもつ蜂は天死の運命を免れない。働蜂の中、その壽命に長短の差あるのもこれがためである。要するに、過勞の結果は腦細胞に破壊を來し死期を早めると考へられる。權勢に慣れ利慾に驅られ休養を忘れて東奔西走する現代人は、蜂の研究から何等かの示唆を受けぬであらうか。

## 四 熱帯の影響

南方の暖地では終年花が咲いてゐるから養蜂にも大に適すだらうと考へ、日本内地から懸々蜜蜂を移植した人があ

獲するけれども、二年と経たぬ内にその勤勉性は消失し、蜜を貯へぬやうになり、折角の好い思ひ付も失敗に歸したといふことである。但し、熱帯でも高燥の涼しい土地では日本内地と同様である。暖地にはいつでも花があるので多の準備は全く不用だから、蜂も勤勉でなくなるものと見える。熱帯地域の原住民などは一般に貯蓄心なく、其日暮しでまだ懶惰であると非難され勝ちだが、熱帯地では植物の成育は旺んで、家の周圍に二三本の椰子と二三株のバナナでもあれば四時食料は充分で、やはり貯蓄の必要を毫も感じないためと推定されるのである。

文化人も生活上の必要に迫られぬと兎角怠け勝ちである。富裕な家に育つた子弟は兎角勉強心が薄く、徒らに依頼心のみ強くて獨立獨行の氣魄に乏しい。故に、良家の親達は子女の教育上、此の點を大に考慮せねばなるまい。西郷南洲先生が「子孫のために美田を買はず」と訓へられたのも、此の點を遺破されたに外ならないと信ずる。

我國はこれまで「持たざる國」と云はれ、天然資源に恵まれず、國內には人口の増殖旺んにして衣食も充分でない處から、大に奮發努力して今日の強大を致した。然るに、大東亞聖戰により東亞の天地から米、英、蘭の勢力を驅逐して、今や「持てる國」にならんとしつゝある。南方その他の豊富な資源を獲得して「持てる國」となつても、日本國民は兎の緒をしつかり締めて着ることなく、英、米、蘭諸國民の轍を履まぬよう大に自戒せねばならぬ。折角富んでも國民が勤勉の精神を失つては何にもならない。吾人は前車の覆轍をよまぬ覺悟が肝要である。

### 五 南日本建設上の注意

長き年月に涉り馬來半島に於て護謨栽培並に蠶業を經營せる石原廣一郎氏(石原産業株式会社社長)はその近著「南

日本の建設」中に、自家の體驗に基き南方建設に關する意見を述べてゐる。即ち、

南方の諸地は先づ氣候の點から見ても年中七八月頃の夏の氣候であつて、長く此の地で勞務に従事すると、兩三年後には體は衰へ體力は衰へ暑さの爲に頭腦は次第に鈍感となり、更に年を重ねるに従ひ勤勉性が衰へ南方土民と同様な姿となつて來て、眞の日本人の特異性を失ふのである。

生活程度低い南方地方には移植民の形に於て出掛けること、即ち、筋肉勞働を以て業をなさうとすれば成功はな

かゝ困難と云はなければならぬ。

尙ほ氏は南方原住民の工業勞働に適せざる點を指摘して、日本内地では一ヶ月に五日位休んで二十五日働くのが普通だが、南方の原住民は生活の樂な處から一ヶ月に五日も働くに裕に生きて行ける。更に彼等には生活上の欲望もないから、工場の勞務者として全く不適當である。南方の如き熱帯地、工業經營に適せざる地に一時の問題に囚はれて、こゝに工場建設を營むが如きは將來の計を誤るものと云はねばならぬのである。従つて、大東亞建設に於ける工業地帯は日本を中心とし、滿洲、支那又は南洋洲、ニューギランドの如き溫帯地を基本となさねばならぬ。

と強調してゐる。この意見には著者も全然同意である。徒らに狭い經濟ブロックなどを考へて、不適當な土地にまで工業を興さんとするが如きは決して得策ではないと思ふ。

南方各地域の異民族を統治、指導するにも彼等の特性や習慣を充分に辨へなくてはなるまい。無暗に日本流の勤勞

や教育を強制しても、民度の低い暖地の原住民は喜ばぬであらう。例へば、南方の暖地に於て古來原住民間に行はれ來つた午睡の如き習慣も自然の要求から起つたことで、彼等の怠惰性のみからではない。又兎角官僚の過弊たる規則實は法治に慣れざる南方原住民に全く不適當である。相當民度の進んだ滿洲國でさへ、日系官吏により煩瑣な規則や法令が次から次に布かれて、法匪なる熟語さへ出来るほど滿洲人の苦情の種となつてゐると聞く。斯の如きは諸民族をして安居樂業各々その處を得しめる所以ではあるまい。その極意では民心の離反を來しはせぬかと懸念されるのである。我が忠勇無比の皇軍により折角裁定された各地域に、多數の官僚出身者が進出してゐるが、累を祖國に及ぼさざるよう希求する者は獨り筆者のみではあるまい。

南方暖地に於ける自然力は温帯で動勉な蜜蜂をさへ其日暮しの貯蓄心なき昆蟲に化するのである。人間とて生物である以上、環境の影響を全く免かれる譯には行かない。幸にも現内閣の根本方針として、集團移民などを南方に送り出さぬと聞いて安堵の思をした。大東亞聖戰後續々と南進する指導階級の若い人達は天理に戻るが如き生活をなす、熱帯の悪影響から免かれると同時に、一二年毎位には必ず内地に還り身心の休養に力め、再び任地に赴き得るよう、政府や民間で考慮して貰ひたいものだ。尙ほ職務の關係上故山に起臥することの尤されぬ場合には、少くも月に一二回は高原の冷涼地に移り、肉體と頭腦の休養をとつて貰ひたい。幸にも南方諸地域には必ず高原地帯あり、既に歐米人等が其處に安息所を設けてゐた。吾々日本人の常として、外地勤務の場合などに兎角その功を怠り、不眠不休の勢で働き、無理な生活を嘗み勝ちである。その結果或は病に罹り、或は過勞に陥り、中途挫折するの他なきに至るのを往々見受ける。共榮國の建設事業は戰爭と異り、腰を据ゑ持久戰の心構へで努力しなければ、決して其の目的を

達成し得るものでないと信ずる。此の點に於ては吾々日本人は隣邦の漢民族などに學ぶ所なければなるまい。これは著者が屢々南洋や南米の暖地に赴き、同胞居住民の活動振りを目撃して、痛切に感じたことである。徒らに時流に順ひて、不眠不休など、呼號するのは、所謂敵米英流の空虚な掛聲に過ぎないと思ふ。(昭和一八、三月)

## あとがき

### 著者の略歴

些か本書の讀者の参考にもならんかと敢てこのあとがきを添へる。

著者は山形縣米澤市に明治五年に生まれ、郷里で小學教育を受け、山形縣立中學校に進み普通學を修めた。然るに、病弱のため中學を中途退學し、専ら健康増進に努めた結果、一年ばかりですつかり丈夫になつた。明治二十年父母の膝下を離れ東京に出で、第一高等中學校の受験準備をなし、明治二十三年入學試験に合格し、獨逸科三級に編入された。當時の高等中學は五年の課程で、豫科三年、本科二年となつてゐた。此の時代學校に教鞭を執つてゐた獨逸の動物學者アドルフ・フリッチエ師の感化を受け醫科志望から理科(動物學)に轉向し、本科に進むとき第二部に入り、明治廿八年東京帝國大學理科大學に入學して動物學を修めた。その頃動物植物學科などの學生は少く、殊に私ときは學生二人のみなので諸先生に文字通り親交し、學問上は素より修養上にも極めて有益な時を造つた。卒業後尙ほ大學院に止まり研究してゐたが、恩師箕作佳吉先生の勸奨により、明治三十三年沖繩縣下の尖閣列島に赴き海禽類殊に信天翁の調査に従事した。石垣島に立寄つた際、マラリア流行の甚だしきを見聞し、該病を動物學的に研究するを須要なりと考へ、東京への歸途京都に立寄り、京都帝國大學總長木下廣次先生と醫學部長坪井次郎先生に相談して、京都

帝國大學の大学院に於て研究するに決心し、同年十月東京から京都に移つた。醫學部の衛生學教室に一席を與へられ、直ちにマラリアと蚊との關係を研究し始めた。當時英國のロナード・ロッセ、伊太利のグラッシー氏等のマラリアの感染徑路の發見があり、歐米の學界を大に賑はしてゐた。然し、我國ではその時までマラリア蚊傳播説に関する研究が未だなかつたのである。

京都附近のマラリア流行地を中心に研究材料を蒐集し、ハマダラ蚊(アノフェレス)を飼育して、吸血試験を行ひ、マラリア原蟲の蚊の體內に於ける發育環を闡明した。研究の傍ら醫學部の講師として寄生蟲學の講義を擔當した。マラリアの研究も一段落を告げ其の成績を發表したので、明治三十五年末京都から東京に移り、北里博士の門に入り痘苗製造所技師に任ぜられ、傳染病研究所に於て病原原蟲の研究を續行した。

明治三十七年春北米合衆國出張の命を受け、渡米してセントルイス市に開催の萬國博覽會に働き、其の用向を濟ました後米國各地を視察して歸朝した。その後間もなく、恙蟲病の研究を命ぜられ新潟縣下に赴き、初めは淺川博士、後北島博士と共に本病の研究に従事し、爾來明治四十四年に至るまで毎夏を新潟縣下の本病流行地に送り、本病病毒の性状及び感染徑路等を闡明した。

明治三十八年傳染病研究所は既存の痘苗製造所及び血清藥院を併合して、芝區愛宕町から芝區白金臺町の新築に移り、その時私は傳染病研究所技師に任命された。越えて明治四十年春ヒリッピン群島に出張を命ぜられ、マニラ市に開催の比島醫學會第四次總會に出席して、牛のピロプラズマに関する研究などを發表し、マニラ市内外の衛生施設を調査して歸朝した。



明治四十一年春獨逸から北里博士の恩師ローベルト・コッホ先生が我國に來遊され、私は北里博士の助手としてコッホ先生に隨伴し教を受くるの幸運に恵まれた。

同年七月京都帝國大學大學院卒業、主論文「京都附近に於けるマラリアと蚊との關係」を提出して醫學博士の學位を授與された。

明治四十四年獨逸出張の命を受け、シベリア經由で獨逸に赴き、ドレスデン市に開催の萬國衛生博覽會に日本委員として約十ヶ月を送つた。博覽會の任務を果たした後、歐羅巴各地の醫學關係の大學及び研究所等を歴訪し、歸朝の途次臺灣總督府の依頼により埃及及びスダン等の熱帯衛生施設を調査して四十五年の春歸朝した。

大正三年春外務省の依頼により所員小泉丹、高野六郎の兩氏と共に馬來半島に赴き、邦人經營のゴム園に於ける衛生改善殊にマラリア防遏の調査を遂げて歸朝した。

然るに、此の年秋十月突如として傳染病研究所は内務省から文部省に移管され、所長北里先生始め所員一同は皆辭職の止むなきに至り遂に野に下つた。辭意の閉居けられた十一月五日に養生園の一角に北里研究所が開設された。隣接の芝原白金三光町に敷地を選定し、建築に着手して約一年後の大正四年末に竣工した。コッホ先生生誕の十二月十一日を卜し開所式が盛大に舉行され、陣容は茲に全く整うた。爾來本所の事業は北里所長、北島副所長統率の下に年と共に發展した。

大正七年春海外移民組合の依頼を受け、私は所員平野憲正氏を伴ひ、移民船で印度洋經由南米伯國に渡航し、在留同胞の最も多きサンパウロ州を中心として各地の衛生状態を調査した。その際サンパウロ州官憲と交渉を重ね、在留

邦人のため一時的に日本醫師、藥劑師及び産婆各六名の開業を認めしめることを得、任務を果たして翌年北米經由で歸朝した。吾々の伯國訪問が機縁となり、其の後日伯兩國醫學者の來往は繁くなり、後にサンパウロ市に日本病院の建設を見るに至つた。

慶應義塾大學に醫科の新設されたのは大正六年であるが、北里博士は福澤先生の鴻恩に報いんとて、進んで創設及び經營一切の仕事を引受け、高弟北島多一博士を補佐役として大に努力され、立派な醫育機關が完成した。北里研究所からは部長の志賀、秦、照内、草間、大谷の諸氏と共に私も慶大醫學部の事業を援助することとなり、新に寄生蟲學及び熱帯病學の教室が設けられ、教材を整備して大正九年に開講した。我國に如上の獨立した講座の設けられたのは慶應義塾大學醫學部を以て嚆矢とする。

大正十年私は突如歐洲行を除儀なくされた。それは第一次世界大戰直後國際平和條約が締結され、その結果として國際聯盟が生れ、その内に阿片問題と公衆衛生問題とを取扱ふ委員會が置かれたので、我國からも委員を派出することとなり、後藤伯と北里先生の勸奨もだし離く遂に委員を引受けたのである。急遽行李を納めて印度洋經由の郵船で渡歐した。爾來約一年間巴里と壽府の間を往來して阿片委員會と保健委員會とに我國を代表して出席し、列強の委員等と折衝し、使命を果たして歸朝したのは大正十一年十一月であつた。

大正十二年は私にとり最も不幸な年で、二月一日には糟糠の妻を喪ひ、秋九月一日には大震災で神田區駿河台の我が家も烏有に歸し、一物をも止めざる有様であつた。旅行先から呼び戻され、政府の臨時震災救護部に入り働き、大震災救護會の總務となり、臨時救護部の副總長を命ぜられ、總長二條基厚公を輔佐して、東京市の内外十數ヶ所に

臨時病院及び診療所を念設して罹災者の救護に盡力した。かゝる非常時に些か微力を致すことを得たのは私の光榮で、之は一に恩師北里先生の推挙によるものである。この多忙な仕事なかりせば、妻を亡ひ家を失へる私は神経衰弱に陥れたかも知れない。門下を愛護せられた師の恩の有難さは今以て忘れられないのである。

大正十三年清浦子爵は組閣の大命を拜し、小橋一太氏が内閣書記官長として采配を振つた。間もなく帝國議會は解散され、衆議院議員の總選挙が行はれた。この時小橋氏から交渉があり、又恩師北里先生と長友北島博士の勸誘もあり、遂に私は意を決して郷里米澤市から立候補することにした。政治に全く門外漢の一學究が選挙戦に臨むのであるから、親戚や友人は何れも反対した。併し、一旦承諾した以上中止する譯にもならず、早速歸郷して陣頭に立ち、同志の援助を受けて憲政會總務黒金泰義氏と鍋を削り戦つた。その結果僅か三十八票の差ではあつたが勝つて議員になつた。

議員になつて間もない大正十三年末政府の依頼により歐洲に赴き、第二回阿片國際會議に専門委員として働いた。更に大正十五年には北米ロックフェラー財團の招聘を受け渡米して、北米各地の醫事衛生施設を視察した。

衆議院には約四年間議席を占めてゐたが、政黨政治華かなりし時代とて黨利黨略が専ら行はれ、正論も顧みられぬ有様であつた。私は醫事衛生問題に専念し使命を果たすべく努めた。憲政會内閣の賣藥稅廢止法案は我國の公衆衛生上有著無益の政策なりと認め極力反対した。然るに、私の屬してゐた政友本黨は政府の與黨憲政會に迎合して賣藥稅の廢止を認めたので大に失望し、私かに議員生活を一日も早く清算せんと決心してゐた。昭和四年に至り議會は解散となり、私は初めてほつとした。この時已に政友本黨と憲政會は合同して民政黨となつてゐたから、濱口總裁に私は

再び議員となるの意志なきを申出で、黒金泰義氏を推薦して公認候補者として貰つた。私は早速郷里に赴き黒金氏の立候補演説會に臨み、有権者に自己の決意を告げ、黒金氏を極力推薦した。幸にして同氏は當選して議員となり、次で總選挙の政務次官にも任ぜられたので、私も大に満足したのであつた。

政界と絶縁した私は元の學究生活に復歸したのを喜んだのも束の間、昭和四年政府の懇請により壽府阿片條約に基き新設された阿片中央委員會の日本委員を受諾するの止むなきに至り、再び阿片問題に關與することゝなつた。爾後昭和十年まで約七年間毎年一回渡歐して、委員會に出席して些か微力を致した。

渡歐の途次北米に立寄り、ロックフェラー財團の主腦部と交渉を重ね、同財團をして我が慶應義塾大學醫學部に豫防醫學教室を寄附せしむるに成功した。更に其の後日本政府に衛生學の研究及び衛生技術官養成機關の新設に對し、百萬金を寄附せしむるに就き些か力を盡し、現在の厚生省研究所の完成を見たのは本懐の至である。

私が多年阿片問題で鍋を削つて闘つた英、米、佛、蘭の諸國は、口に人道を唱へながら阿片其の他の麻薬に依り東亞の諸國民を搾取し來つた。私は已に齡古稀を超えた今日彼等の罪業が報いられ、彼等の勢力が東亞の天地から一掃されたのを見て洵に痛快に堪へない。明治、大正、昭和の三聖代に生を享けた賜物と感激を禁じ得ないのである。私は人的要素の肝要なる戦時の日本に於て、老を忘れて北里研究所及び慶應義塾大學醫學部に職責を果しつゝ、大東亞共榮國の建設に些かたりとも寄與せんものと誓ふに鞭打ちつゝある次第である。

圖書會社  
一五〇三六六



南方經濟論と  
厚生問題

著者 宮島幹之助

發行者

渡

邊久吉  
京都市何屋町二條下ル

印行者

(圖書會社) 同

朋舍  
京都市壬生川五條下ル

發行所

人

文書院  
京都市何屋町二條下ル  
電話上一八四八番  
支店(大阪)八二一六三番  
支店(東京)二八四九番  
會員會社 一一二二五三

配給元

日本出版配給株式會社  
東京都神田區淡路町二丁目

印行

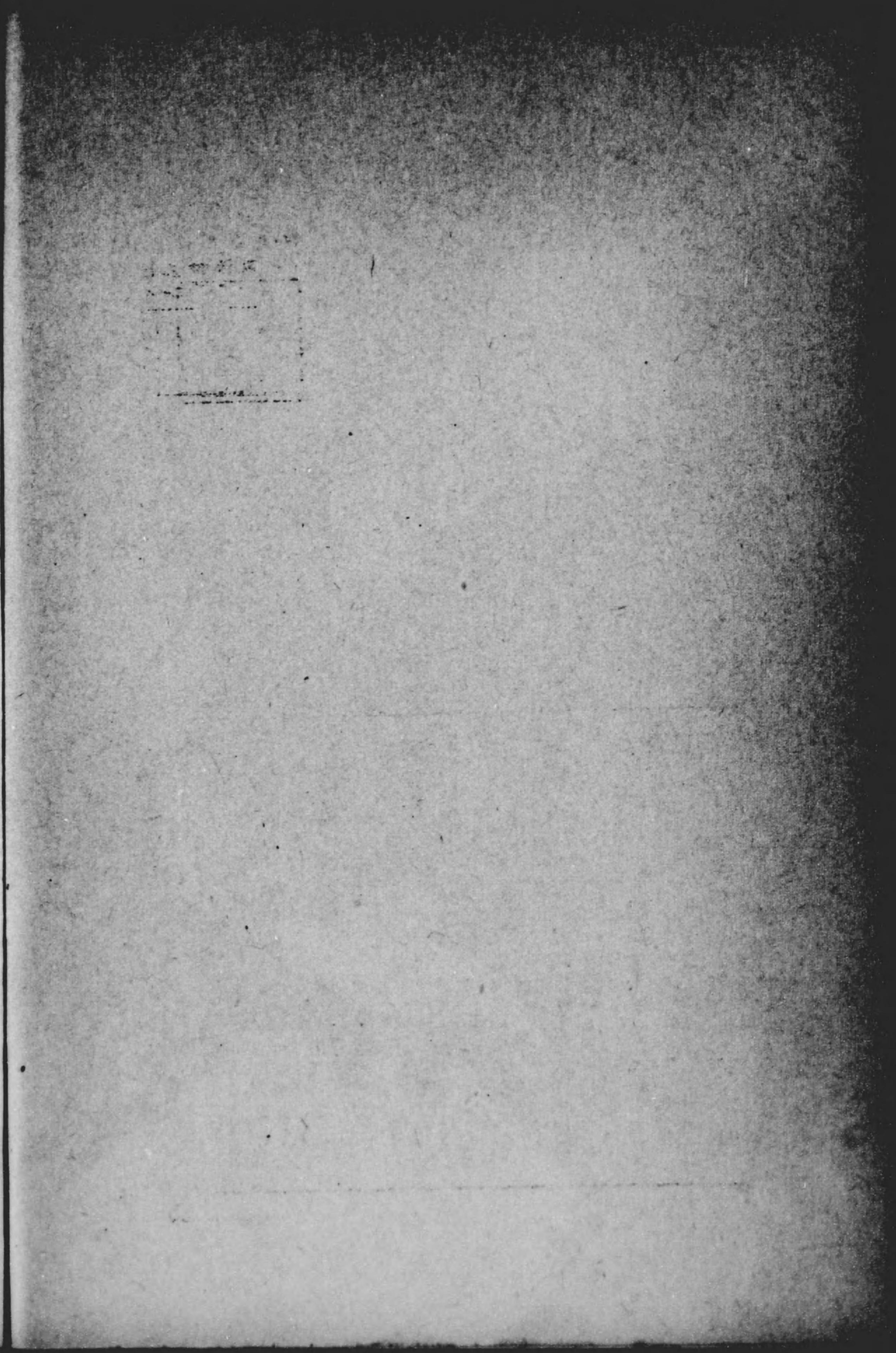
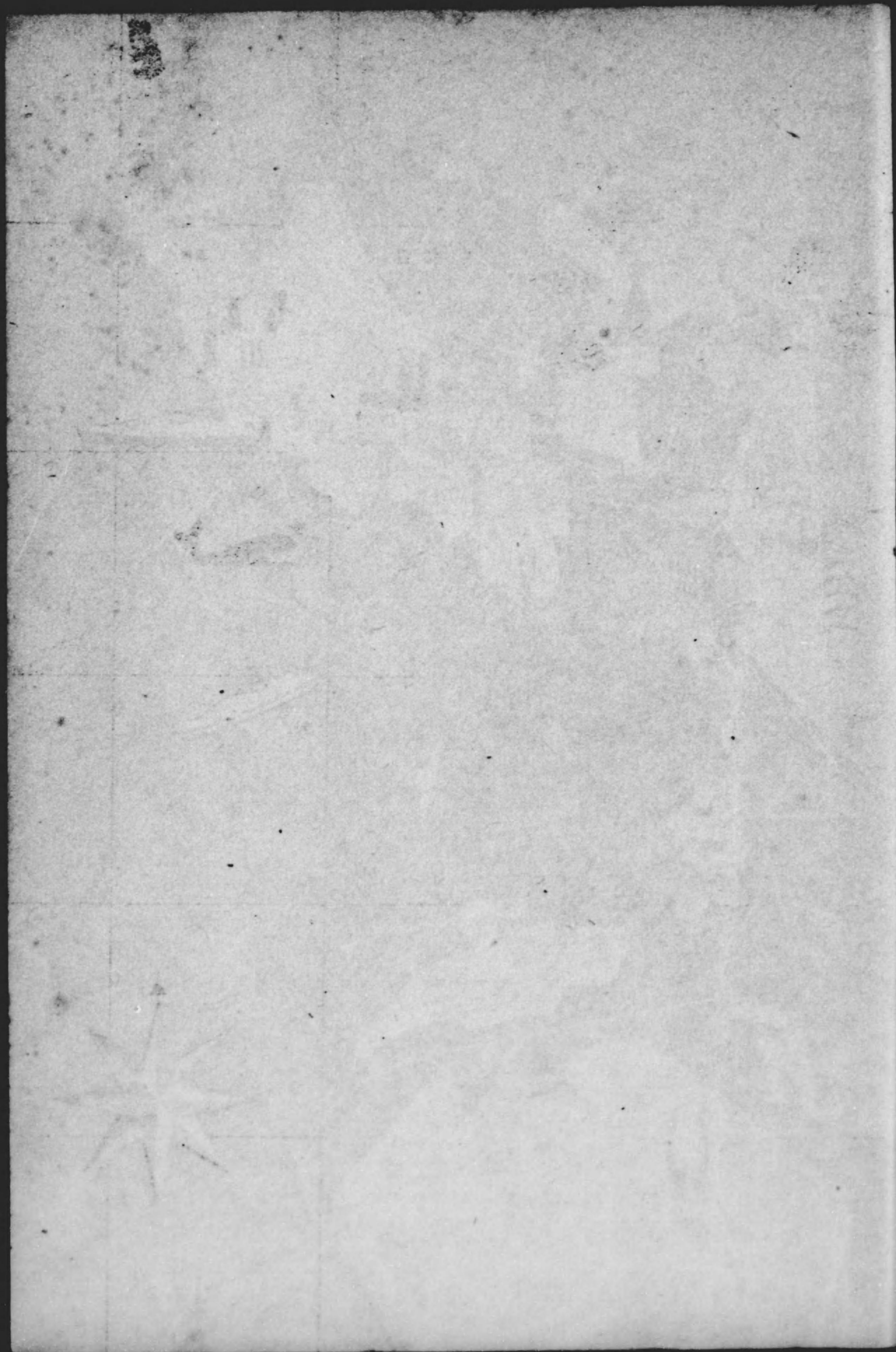
昭和十八年十一月二十日

發行

昭和十八年十一月廿五日

(2000部)

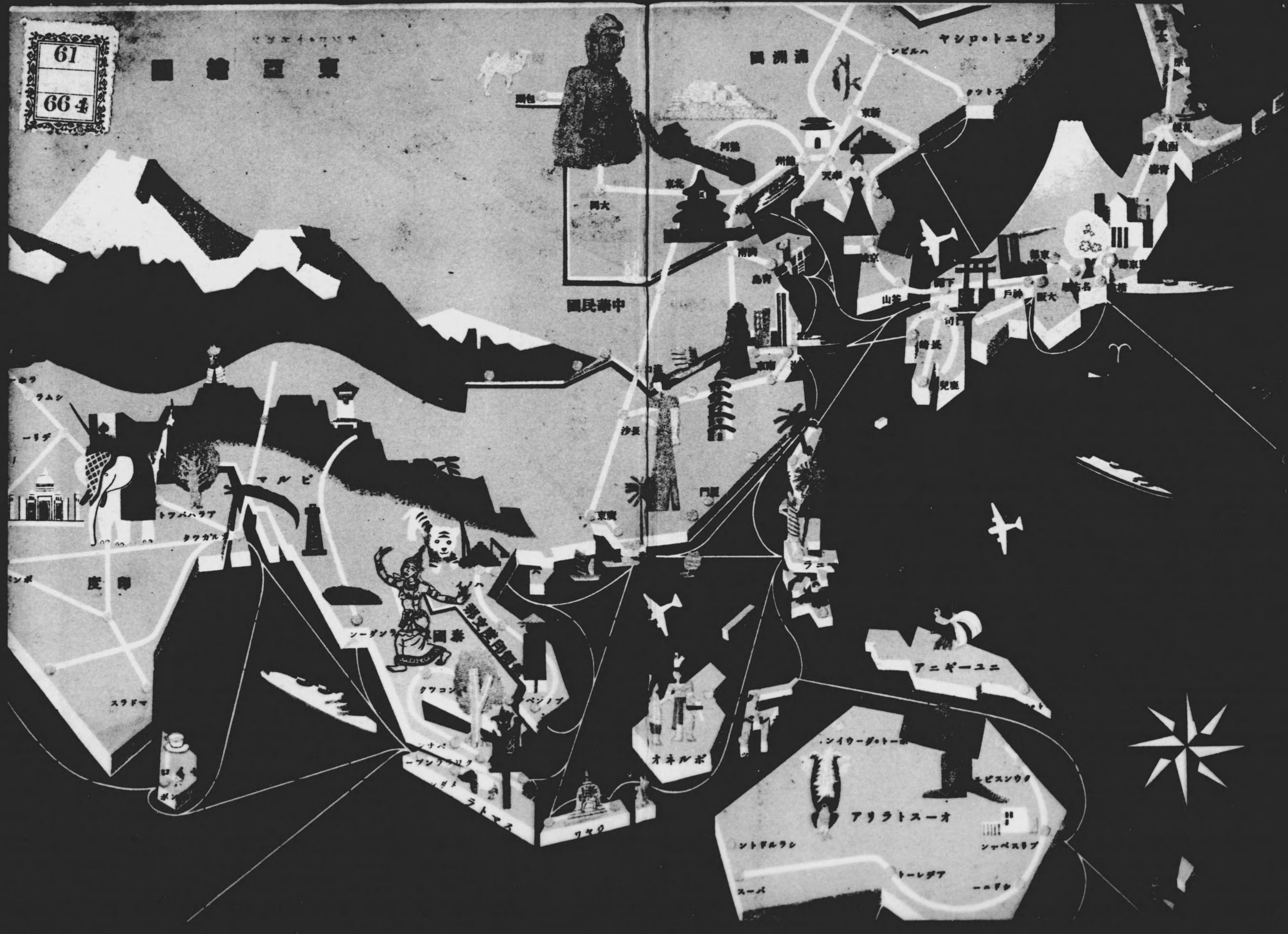
●定價 八拾圓





61  
664

東亞地圖



關西

關大

國民華中

滿洲國

ヤシロトエビツ

ンビルハ

タツトス

東京

河船

州船

天奉

京北

南河

島青

山笠

戸神

阪大

司口

崎長

兒妻

沙長

東廣

ラニ

アニギーユニ

オネルボ

ンイウーダトー

ンビスウロ

アリラトスーオ

ントルラシ

ンペスリフ

トーレダア

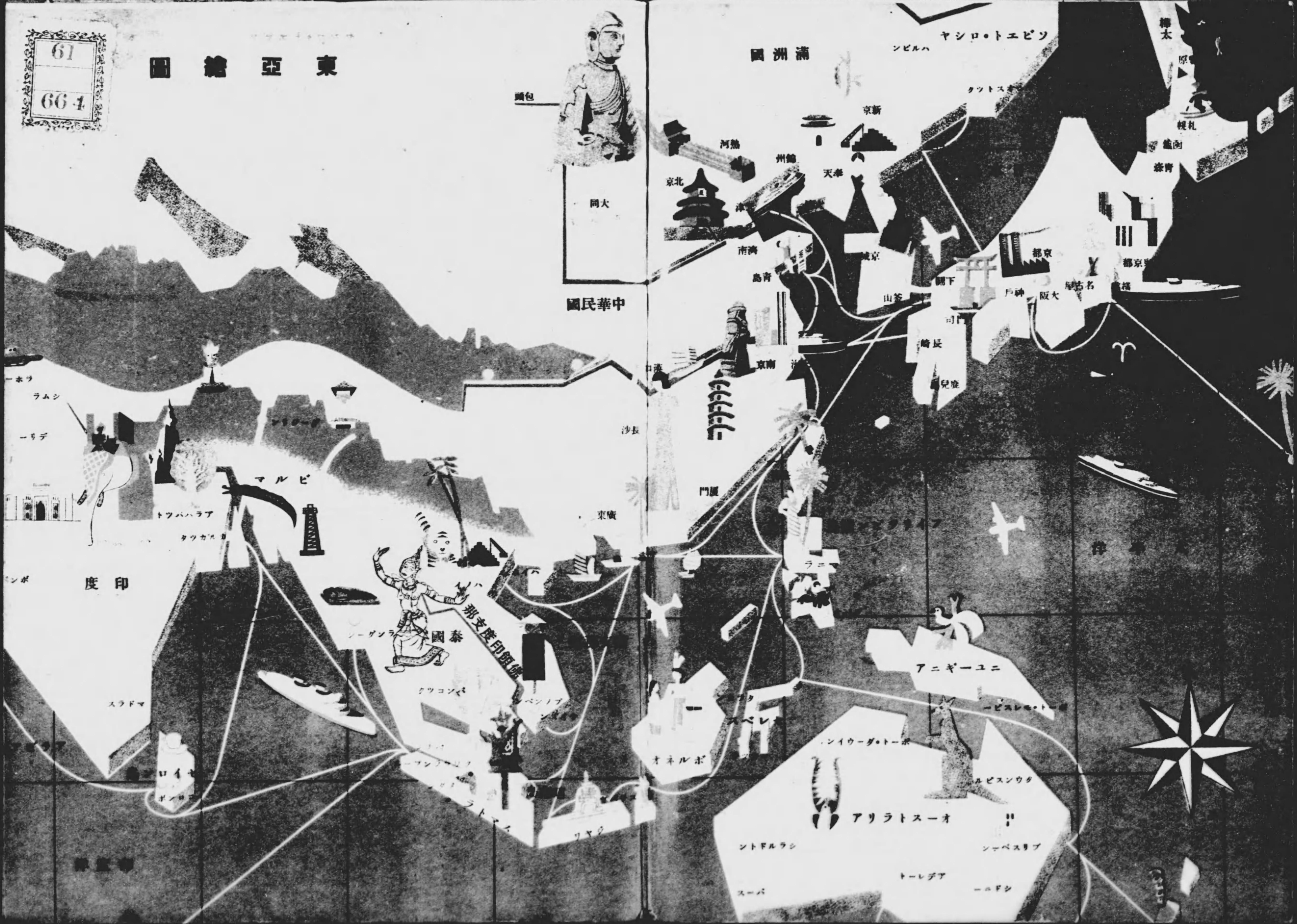
スーパ

ニギク



61  
664

# 東亞地圖



蘭包



同大

國民華中

滿洲國

ヤシロトエビソ

樺太



京北

南滿

高青

京南

門厦

オネルボ

京新

天奉

城京

山笠

調下

崎長

兒鹿

都京

戸神

阪大

都京

名古

橋

幌札

盛岡

森青

ーホラ

ラムシ

ーリデ

マルビ

トツハラア

タツカス

沙長

東廣

度印

國泰

別支度印館總

クワコン

ベツノ

スラドマ

ロイセ

ゴン

ワヤ

アニギーユニ

ービスレモト

ンイウーダト

ルビスウタ

アリラトスーオ

ントフルラシ

ンベスリブ

トーレデア

スーバ

ーニフシ



